

天台山の詩歌（其九）

——初唐・盛唐（補遺）

薄 井 俊 二 埼玉大学教育学部国語教育講座

キーワード：天台山、天台集、漢詩、仏教文学、道教文学

はじめに

本稿は、天台山に関わる詩歌について検討を加えることを通して、当時の人々の天台山に対するイメージとその変遷を考察しようとするものである⁽¹⁾。今回は、これまで対象としなかった初唐・盛唐期の補遺とする。実際には初唐期のものはなく、孟浩然の作品二点、李白の作品一点、岑参の作品一点、皇甫冉の作品二点を取り上げる⁽²⁾。

九 天台山の詩（其九）——初唐・盛唐（補遺）

【補遺1】遊雲門寺寄越府包戸曹徐起居

雲門寺に遊び越府の包戸曹・徐起居に寄す

孟浩然

☆なし

★全唐詩卷一五九、孟浩然集卷一

■本文と訓訳

我行適諸越	我が行は越に適くにして
夢寐懷所歡	夢寐に歡する所を懷ふ
久負獨往願	久しく負ふ 獨往の願ひ
今來恣遊盤	今來り 遊盤を恣にす
台嶺踐磴石	台嶺に磴石を踐み
耶溪泝林湍	耶溪に林湍を泝る ^{さかのぼ}
捨舟入香界	舟を捨てて香界に入り
登閣憩旃檀	閣に登りて旃檀に憩ふ
晴山秦望近	晴山 秦望近く
春水鏡湖寬	春水 鏡湖寬し
遠行佇應接	遠行 佇みて應接し
卑位徒勞安	卑位 徒だ勞安するのみ
白雲日夕滯	白雲 日夕に滯し
滄海去來觀	滄海 去來して觀る

故國 眇 天末 故國 天末に眇^{はるか}なり
良朋 在 朝端 良朋 朝端に在り
遲 爾 同 携 手 爾を遲^まつ、同に手を携へ
何時方 挂 冠 何れの時か方に冠を挂せん

■文字の異同と校勘

*孟浩然集を底本とする。

題名を全唐詩は「題雲門山〔作寺、一作遊龍門寺〕寄越府包戸曹徐起居」とする。

「燈」全唐詩作磴。「行」全唐詩作懷〔二作行〕。「日夕」底本作去久。

全唐詩作日夕。從李景白・徐鵬改。「去」底本作竭。全唐詩作去〔二作竭〕。

從李景白・徐鵬改。「携」全唐詩作攜。

■語注

○雲門寺：会稽県雲門山（今の紹興市）にあった。晋の王猷之がこの地に居住していた。義熙三年（四〇七）に五色の祥雲が現れたのを契機に、安帝が寺院を創建し、雲門寺と命名したという。孟浩然に「雲門寺西北六七里聞符公蘭若最幽與薛八同往」（詩集卷二）の詩があり、李景白らは、越州（会稽）滞在時の、開元十九年（七三二）ごろの作だろうという。○越府：越州。府治は会稽。○包戸曹：戸曹は、古籍や徴税を司る地方官。徐鵬は、賀知章らと並び称されていた包融ではないかとする。孟浩然に「宴包二融宅」（詩集卷二）、「與崔二十一遊鏡湖寄包賀二公」（詩集卷二）があり、「唐才子伝」に、包融は「孟浩然交厚」とある。○徐起居：起居は、皇帝の起居注を司る起居舎人。徐は不詳。○適諸越：諸は于。「莊子」逍遙遊に「宋人資章甫而適諸越（宋の人が章甫という冠を仕入れて、越の国に売りにいった）」

とある。○所歡：李景白は包徐二氏のことというが、ここは夢に見る程行きたかった江南をいうのではないか。○獨往：自由自在に遊行すること。「莊子」在宥に「出入六合、遊乎九州、獨往獨來、是謂獨有。」とあり、「列子」力命にも「獨往獨來、獨出獨入、孰能碍之」とある。また、謝靈運「入華子岡是麻源第三谷」（「文選」卷二十六）に「且申獨往意、乘月弄潺湲（私は独往の心を伸ばそうとして、月下にさらさらと流れる水音をたのしむ）」とあり、李善注引く司馬彪は「獨往、任自然不復顧世也」と注する。○台嶺：天台山のこと。孫綽「遊天台山賦」（「文選」卷十七）に「苟台嶺之可攀、亦何羨層城」とある。○磴石：全唐詩は磴石。意味は同じく、山路の石段。孫綽「遊天台山賦」に「跨穹隆之懸磴、臨萬丈之絕冥」とあり、李善は「懸磴、石橋也」と注する。天台山奥地の景勝地、石梁飛瀑を言う。○耶溪：若耶溪。紹興の南にあつて、鏡湖に注いでいた（いま、鏡湖なし）。西施が紗を洗ったという伝承から「洗紗溪」ともいい、「水経注」漸江水注によれば、とても澄んでいるので、衆山が逆さまに映ることが絵に描いたようであるという。孟浩然に「耶溪泛舟」（詩集卷二）がある。○香界：仏教寺院のこと。沈佺期「紹隆寺」に「香界繁北渚、花龕隱南巒」などがある。○旃檀：旃檀那の略語で、外国産の香木。多く仏像の材料となつた。檀香木で造られた楼閣、もしくは仏閣。○秦望：山名。紹興市の東南。秦の始皇帝がここに登つて南海を遠望したと伝える。○鏡湖：鑑湖とも。会稽山の北麓あたりにあつた。○應接：対応、応対すること。ここでは、自然の景勝を鑑賞すること。「世説新語」言語に、「王子敬（猷之）云、從山陰道上行、山川自相映發、使人應接不暇。」とある。○眇天末：天末は天の反対側。陸機「擬行行重行行」（「文選」卷三十）に「遊子眇天末、還期不可尋（旅に出ている夫は天のもう一方ほどの遠くにいて、いつこちらへ戻ってくるのやらは分らない）」とある。○遲：待つ。○挂冠：冠を

脱いで掛ける。前漢末逢萌の故事で、官職を辞すること。

■口語訳

私の今回の遊行は、越（江南）へ行くものであり
喜ばしい場所として夢にまで見ていたところであつた
昔から自由自在に遍歴したいと思つていたが
今こうして遊覧を恣にしている

天台山では有名な石橋を渡り

若耶溪では林の中の急流を遡る

船を降りて仏寺に入り

梅檀の香る仏閣で休んだりする

晴れた山中からは秦望山も間近に見える

雪解け混じりで水かさが増え鏡湖も広々としている

遠くへの遊行で、ゆつくりとたたずんで景勝を鑑賞すれば

自分の地位が低くとも、心安らかにいられるのだ

白雲が夕方になつても漂つており

滄海は行き来しながら眺める

故郷は遙か遠くにあり

あなたたち（友人達）は政府の高い地位に就いている

お待ちしていますよ、一緒に手を携えて

何時の日か官を辞して、この地でともに遊ぶことを

■解説

五言古詩。韻字は、「歡・盤・湍・檀・寛・安・觀・端・冠」で、
平水韻では上平一四寒の韻。換韻はしていないが、内容から三部構
成とみた。

江南を旅する中で、雲門寺に遊んだ折りの作。山川遊行の楽しみを、
都で官に就く友人に伝え、ともに遊樂することを誘う。江南の名勝
の一つとして、天台山がうたわれている。石梁飛瀑を訪れたことを
述べており、天台山を实地に訪問したことを踏まえる。一連の江南
の旅の途中で、天台山訪問を回顧するものとなっている。

【補遺2】宿中山翠微寺空上人房

中山翠微寺の空上人の房に宿す

孟浩然

☆天台前集別編

★全唐詩卷一五九、孟浩然集卷一

■本文と訓訳

翠微終南裏 翠微 終南の裏

雨後宜返照 雨後 返照に宜し

閉關久沈冥 關を閉じ久しく沈冥し

杖策一登眺 策を杖つきて一たび登り眺む

遂造幽人室 遂に幽人の室に造りいた

始知靜者妙 始めて靜者の妙を知る

儒道雖異門 儒道門を異にすと雖も

雲林頗同調 雲林頗る調を同じくす

兩心喜相得 兩心 相得たるを喜び

畢景共談笑 畢景 談笑を共にす

暝還高窗眠 暝 還りて高窓に眠り

時見遠山燒 時に遠山の燒くるを見る

緬懷赤城標 緬はるかに懷ふ赤城の標

更憶臨海嶠 更に憶ふ臨海の嶠

風泉有清音 風泉 清音有り

何必蘇門嘯 何ぞ蘇門の嘯を必せん

■文字の異同と校勘

*題名を、全唐詩は「題終南翠微寺空上人房（一作宿終南翠微寺）」、孟浩然集は「宿終南翠微寺」とするが、「題終南翠微寺空上人房」とする版本もある。

〔登〕天台前集作遊。做孟浩然集・全唐詩改登。〔喜相〕全唐詩作相喜（一作喜相）。〔眠〕全唐詩作眠（一作昏）。〔音〕全唐詩作音（一作聽）。

■語注

○中山：不詳。この山名を伝えるのは天台前集のみ。翠微寺と関わるのは終南山であることから、孟浩然集などのように終南山とすべきであろう。終南山は、長安の南に横たわる山。○翠微寺：「元和郡県図志」関内道長安県に、終南山太和谷に太和宮があり、武徳八年（六二五）創建で、貞觀十年（六三六）に廢、同二十一年（六四七）に翠微宮として再建され、

のちに寺に改められたとある。趙桂藩は、寺に改められたのは盛唐期以前であり、孟浩然のこの詩がそのことを示す一つの証拠であろうという。

○空上人：あるいは空上人。不詳。○閉關：世人との交わりを絶つこと。江淹「恨賦」（「文選」卷十六）に「閉關却掃、塞門不仕（門を閉ざして客を断り、二度と出仕しなかった）」、顔延之「五君詠・劉參軍」（「文選」卷二十一）に「劉靈善閉關、懷情滅聞見（劉靈はよく鍵をかけて閉ざしたように、情欲をしまいこんで耳に聞き目に見ることをやめる）」とある。○沈冥：

隠れ住み人跡を絶つて仕えないこと。楊雄「法言」問明に「蜀莊沈冥」とあり、李軌は「沈冥、猶玄寂、泯然無跡之貌」と注する。○幽人：隱遁者。空上人を指す。「周易」履・九二に「履道坦坦、幽人貞吉」とあり、孔穎

達は「幽人貞吉者、既無險難、故在幽隱之人守正得吉」と注する。○靜者：処虚守靜の人。これも空上人を指す。「論語」雍也に「智者動、仁者靜」とあり、謝靈運「過始寧墅」（「文選」卷二十六）に「拙疾相倚薄、還得靜者便（官吏としては、つたなく、まあ病の身でもあり、進退に迷つてい

たのに、このたび静かに山水の間におとつく便宜を得た）」とある。○儒道：孟浩然が自分を儒にあてている。道はここでは仏教。空上人にあて

る。○雲林：雲谷山林など、自然の中の隱遁にふさわしいところ。○同調：曲調があうように、意趣が合致すること。謝靈運「七里瀨」（「文選」卷二十六）に「誰謂古今殊、異世可同調（古と今とは時代が違うなど何

とて言おうぞ、時代は異なっても調子を同じくすることはできるのだ）」とあり、李善は「樂稽耀嘉曰、聖人雖生異世、其心意同如一也」を引き、「調、猶運也。謂音聲之和也」と注する。○相得：意気投合する。「史記」魏其

武安侯列伝に「相得驩甚、無厭、恨相知晚也」とある。○畢景：日没。一日中。鮑照「還都道中詩」（「文選」卷二十七）に「侵星赴早路、畢景遂前儔（星をいただいて早朝の路を歩み、日の落ちるまでも前に行く侶のあ

とを逐いつつ進む」とある。○暝還：還に「来」「到」の意味があるので、訳文のように訳した。○遠山燒：徐鵬や趙桂藩のいう野火ではなく、山が輝く様だろう。しかし曹永東が夕焼けとするのは取らず、朝焼けと取った。○赤城標：孫綽「遊天台山賦」に「赤城霞起以建標」とあるのを踏まえる。○臨海嶠：謝靈運に「登臨海嶠、初發彊中作。與從弟惠連、見羊何共和之詩」がある（「文選」卷二十五）。ここでは天台山に隣接する天姥山を指す。○清音：清らかな音楽。自然が奏でる音。左思「招隱詩」一（「文選」卷二十二）に「非必有絲竹、山水有清音（琴と笛との音楽を待つまでもなく、山林や谷川は清らかな音を発する）」とある。○蘇門嘯：蘇門山における嘯。嘯は、口をすぼめて高く長く声を出すことだが、魏晉以後は、高踏的な遊びであった。「晉書」阮籍伝には、阮籍が蘇門山で孫登に出会い、阮籍が長嘯して退くと、半嶺に至るころ、孫登の鸞鳳の如き嘯のが巖谷に響き渡ったという話を載せる。

■口語訳

翠微寺は終南山の中にあり

雨上がりの中で夕日を浴びて輝いている

私は門を閉ざして人と交わりを絶ち、長く人跡を絶っていたが杖をつきながらひとたび終南山に登り、眺望を楽しもうとした

かくして隠遁者の住まいに至り

そこではじめて心静かな人の妙味を理解した

私と上人とは異なる立場にあるのだが

自然の中での隠居を意趣とする点では調べを同じくする

ふたりとも意気投合したことを喜び

日が暮れるまでもに談笑した

暗くなつてから翠微寺の高い窓の下で眠り

時に遠くの山が朝焼けで赤く染まるのを眺める

やがて遙か遠くの天台山赤城の霞が標識となっていたのを想起し

更には臨海の高く聳える山が追憶されてきた

自然の風や泉の中にこそ、清らかな音楽がある

どうして蘇門山における孫登の長嘯だけが、よい音だといえよう

■解説

五言古詩。韻字は、「照・眺・妙・調・笑・燒・嶠・嘯」で、平水韻では、去声一八嘯の韻。

終南山の翠微寺に空上人を尋ね、その隠遁的な生き方に意気投合し、更に寺に泊まつての感興を歌つたもの。儒仏の立場を超えて、幽遠な自然の中で隠棲することの価値を述べる。

翠微寺の幽遠さを感じながら、美しい朝焼けを眺めているうちに想起されるものとして、赤城山の霞が登場する。隠者の住む環境としてふさわしいところとして天台山があげられている。赤城山が標識となるという語句は、孫綽の賦に見え、常套的と見えるかもしれない。しかし翠微寺の幽遠さを歌う中で、その連想として天台山があがつてきているという点に着目するならば、天台山訪問が孟浩然に強い印象を与えていたことが、こうした表現につながっているとみることができらるだろう。

【補遺3】 留別西河劉少府

西河の劉少府に留別す

李白

☆なし

★全唐詩卷一七四、宋本李太白集卷一三、王注本李太白集卷一五。

自有兩少妾	自ら兩少妾有り
雙騎駿馬行	駿馬に雙騎して行く
東山春酒綠	東山 春 酒 綠に
歸隱謝浮名	歸隱して浮名を謝せん

■本文と訓詁

秋髮已種種	秋髮 已に種種たり
所爲竟無成	爲さんとするとところ竟に成る無し
閑傾魯壺酒	閑かに傾く魯壺の酒
笑對劉公榮	笑ひて對す劉公榮

謂我是方朔	謂ふ、我は是れ方朔
人間落歲星	人間に落ちたる歲星なり
白衣千萬乘	白衣 萬乘に干めらるるに
何事去天庭	何事ぞ天庭を去る、と

君亦不得意	君も亦た意を得ず
高歌羨鴻冥	高歌して鴻冥を羨む
世人若醯雞	世人 醯雞の若く
安可識梅生	安んぞ梅生を識るべけんや
雖爲刀筆吏	刀筆の吏となると雖も
緬懷在赤城	緬に懷ふは赤城に在り

余亦如流萍	余も亦た流萍の如く
隨波樂休明	波に隨ひて休明を樂しむ

■文字の異同と校勘

*宋本を底本とする。

〔秋〕宋本・全唐詩・王注本作秋〔一作我〕。〔閑〕全唐詩作間。

■語注

○西河：河東道。いま山西省汾陽。 ○劉少府：少府は臯尉の別称。不詳。

○秋髮：白髮。 ○種種：髮の毛が短い様。 「左伝」昭公三年に「(八月)盧蒲癸見、泣且請曰、余髮如此種種、余奚能爲」とあり、杜預は「種種、短也」と注す。 ○魯壺：魯が周室に献上した壺。 「左伝」昭公十五年に「(十二月)(周天子)以文伯宴、樽以魯壺」とあり、杜預は「魯壺、魯所獻壺樽」と注す。「種種」に続き「左伝」を踏まえる。 ○劉公榮：東晋の人。名は昶。「世説新語」注引く「竹林七賢者」に「劉光榮通士、性尤好酒」とある。「世説新語」任誕篇に、彼がどんな身分の人とともに酒を飲んだこと、同簡傲篇に、王戎と阮籍とが飲んだ時、劉光榮も同席し、一杯の杯ももらわなかつたが談論を樂しんだ、という話を載せる。酒好きの代表格。ここでは対面している劉少府になぞらえている。 ○方朔：東方朔。漢武帝期の侍臣で滑稽。様々な伝説があるが「列仙伝」巻下に「東方朔、…智者疑其歲星精也」とあり、「初学記」巻一星・歳精に引く「漢武帝内伝」に、東方朔が死んだので武帝が西王母の使者に問うたところ、使者は、朔はもともと木帝の精で、歳星であつたのが、人間世界に遊びに降りていただけで、

武帝の臣下ではない、と告げる話がある（この話は、現行本の「漢武内伝」には見えない）。○歳星：木星のこと。○白衣：無位無官の人。○鴻冥：鴻が遙か冥冥を飛べば狩人から身を守るように、隠者が高踏的に隠遁して世間から離れ、命を全うすることをいう。揚雄「法言」問明に「治則見、亂則隱。鴻飛冥冥、弋人何慕焉」とある。大野は「宮廷に栄達する人々を羨ましく思っている」と解するが、ここは隠遁へのあこがれととるべきであろう。○醯雞：酒や酢の物を入れた甕にわく小虫。「莊子」田子方篇に「孔子出以告顔回曰、丘之於道、其猶醯雞與」とあり、「列子」天瑞篇に「醯雞生乎酒」とある。○梅生：梅福。漢の人で、王莽が篡奪すると、家を出て隠遁した。江南には彼の伝説を伝える場所が多くある。謝靈運「会吟行」(「樂府詩集」卷六十四)に「范蠡出江湖、梅福入城市」とある。○刀筆吏：書記を司る胥吏。高級官僚ではない。○緬懷在赤城：仙山である天台山の赤城山へのあこがれ。孟浩然的【補遺2】の詩の「緬懷赤城標」に酷似した表現。○流萍：ただよう浮き草。○休明：立派で明らかかなこと。転じて、明君、盛世。謝朓「始出尚書省」(「文選」卷三十)に「惟昔逢休明、十載朝雲陛(おもうに曾て徳すぐれ明らかかな武帝の世にめぐりあい、十年間も朝廷に仕えてきた)」とあり、李善は「休明、謂齊武皇帝也」と注する。○東山：東晋の謝安は、会稽の東山に若くして隠棲した。ここでは隠居あるいは游憩の地を代表させている。○春酒緑：大野は、春になって酒が熟成して緑色になったというが、やはり山の緑ではないか。○謝浮名：謝靈運「初去郡」に「伊余秉微尚、拙訥謝浮名(私は山水の間に隠棲したい志を持ち、つたなさとくちべたのまままで実質以上の名声を退ける)」とある。実質以上の虚名を遠慮すると言う意味だが、李白としては、世間の評判そのものが価値のないものとの認識だろうから、つまらぬ評判と解した。

■口語訳

白髪は既に乏しくなり

何事かをなそうと思ってきたことも何一つ実現しないでいる
いまや静かに魯国の杯を傾け

劉公栄にも比すべき劉少府と談笑するのみ

君は言う、私李白は東方朔と同じく

人間世界に落ちてきた木星である

無位無官の身でありながら帝王に求められて仕官していたのに
どうして朝廷を去ることになられたのですか、と

そういうあなたもまた、この世間に満足を得られず

高らかに歌いながら、鴻が冥冥を飛ぶのをうらやましく思っている
世間の人々は酒壺に沸く小虫のようなもので

あなたも等しいあなたのことなどとうてい理解はできないのだ
あなたの心は遙かな仙山である赤城山を思い描いているのだ

そういう私も漂う浮き草のように
波にまかせて太平の世を楽しんでいる

私には二人の若い愛人がおり
駿馬に二人を乗せて、ともに旅に従わせている

遙かな東山では、春の季節とて緑が美しく、酒もあるだろう
そこへ帰隠して、世間の評価などと言う、つまらない名声はご遠慮

しよう

■解説

五言古詩。韻字は、「成・榮・生・城・明・行・名」で、平水韻では下平八庚の韻。「星・庭・冥」で、平水韻では下平九青の韻。通韻であろう。

大野は、天宝十二年（七五三）の作、安旗は天宝四年（七四五）の作とする。「去天庭」とあり、翰林学士を辞任したのが天宝三年なので、その後の作。魯壺とあれば、山東に滞在していたときの作か。劉某と酒を酌み交わしながら、謝安など、過去の隠者たちと自分たちを重ね合わせながら、高踏的な隱遁志向を歌ったもの。一方仕官への忌避と未練とがほの見える。

天台山については、隱遁志向の劉某が、仙山赤城山へのあこがれを抱いているという表現で登場している。ただし、その句は、孟浩然の【補遺2】の表現と酷似している。孟浩然の句を踏まえているのだろうか。

【補遺4】送祁樂歸河東

祁樂の河東に歸るを送る

岑參

☆なし

★全唐詩卷一九八、岑嘉州詩卷一

■本文と訓訳

祁樂 後來秀 祁樂は後來の秀にして
挺身出河東 挺身して河東を出づ

往年詣驪山 往年 驪山に詣り

獻賦温泉宮 賦を獻ず 温泉宮
天子不召見 天子 召見せず
揮鞭遂從戎 鞭を揮つて遂に戎に従ふ

前月還長安 前月 長安に還るに
囊中金已空 囊中の金 已に空し
有時忽乘興 有時に忽ち興に乗ずる有り
畫出江上峯 畫き出す江上の峯

牀頭蒼梧雲 牀頭に蒼梧の雲

簾下天台松 簾下に天台の松

忽如高堂上 忽として高堂の上の如く

颯颯生清風 颯颯として清風 生ず

五月火雲屯 五月 火雲 屯し

氣燒天地紅 氣燒きて 天地 紅なり

鳥且不敢飛 鳥すら且つ敢へて飛ばず

子行如轉蓬 子 行くこと轉蓬の如し

少華與首陽とは 少華と首陽とは

隔河勢爭雄 河を隔てて勢ひ雄を争ふ

新月河上出 新月 河上に出で

清光滿關中 清光 關中に滿つ

置酒灞亭別 置酒す灞亭の別れ

高歌披心胸 高歌し心胸を披く
君到故山時 君が故山に到るの時
爲謝五老翁 ために五老翁に謝せよ

■文字の異同と校勘

*岑嘉州詩を底本とする。

〔生清〕全唐詩作生清（一作聞江）。〔謝五〕底本作吾謝。做全唐詩作改。

■語注

○祁樂：諸注は、画家の祁岳であろうという。杜甫「奉先劉少府新畫山水障歌」に、劉少府の絵を褒めて「畫師亦無數、好手不可遇。對此融心神、知君重毫素。豈但祁岳與鄭虔、筆跡遠過楊契丹（画かきはいくらでもいるが、上手にはお目にかからない。この画の前では精神がしずまり、あなたの美術の重厚さをさとする。祁岳・鄭虔どころじゃない、楊契丹さえ見かえさんばかりの筆づかい）」とある。祁岳が当時定評のある画家であったことが分かる。張彦遠「歴代名画記」には記事がないが、陳鉄民・廖立によれば、朱景玄「唐朝名画録」に「空有其名、不見踪跡」としてあげられている二十五人の中に、祁岳が見えるという。岑参には「祁四再赴江南別詩」「臨洮客舍留別祁四」があり、その祁四も同じ人物だろうとされる。なお杜甫の題にある劉少府の名は、李白【補遺3】にも見える。同じ人物であるかは不詳。また杜甫の詩には「若耶溪」「雲門寺」の語が見える。これも孟浩然【補遺1】に見えるが、これも偶然であろうか。○河東：「新唐書」地理志に「河中府河東郡」とあり、今の山西省永濟県。○後來秀：後輩中の優秀な人物。「晋書」郭舒伝に「郷人少府范晷・宗人武陵太守郭景、咸稱舒爲後來之秀」とある。○挺身：奮い立って立つこと。○驪山：陝

西省臨潼県にある。○温泉宮：唐玄宗の離宮。「元和郡県図志」によれば、開元十一年（七二三）の創建で、天寶六年（七四七）に華清宮と改称されたという。○從戎：軍隊に身を投じること。曹植「雜詩」（「文選」卷二十九）に「類此遊客子、捐軀遠從戎（それはまるで、このさすらい人が、我が身を棄てて遠く軍に従うにことならぬ）」とある。○蒼梧：九疑山とも。湖南省南寧県の南。舜が葬られたところとされる。謝朓「新亭渚別范零陵」（「文選」卷二十）に「雲去蒼梧野、水還江漢流（蒼梧の野の方へ雲は去り、江水漢水の流れば海に還り注ぐ）」とある。○天台松：天台山と松については、孫綽「遊天台山賦」に「蔭落落之長松」とあり、両者の結びつきは強い。廖立は、積景雲の「画松」の詩「畫松一似眞松樹、且待尋思記得無。曾在天台上見、石橋南畔第三株」を引く。○火雲：赤い雲。炎夏の雲。蕭統「錦帶書十二月啓・蕤賓五月」（梁昭明太子文集）卷三に「凍雨洗梅樹之中、火雲燒桂林之上（冷たい雨が梅の木々を洗い、燃える雲が桂林の上を焼く）」とある。○轉蓬：根無し草。曹植「雜詩六首（其二）」（「文選」卷二十九）に「轉蓬離本根、飄飄隨長風（風に転ずる蓬は、もとの根から離れてひらひらと、遠く吹き過ぎる風のまにまに去つてゆく）」とあり、李善注は「説苑」卷十敬慎より以下の抜粋を引く。「魯哀公棄國走齊。：曰『是猶秋蓬惡於根本、而美於枝葉。秋風一起、根且拔矣』（『私の有り様は、ちょうど秋の蓬草が根本を憎んで厭い、逆に枝葉をよしとするのと同じであった。秋風がひとたび起これば、根つこから抜けてしまうのだ。』）。○少華：華山の麓の小山。今の陝西省華陰県南にある。○首陽：雷首山とも。今の山西省永濟県の南、黄河の北岸、河東の地にある。「述征記」（「芸文類聚」卷七華山引）に「華山對河東首陽山、黄河流于二山之間」とある。○新月河上出：劉開揚は、謝莊「月賦」（「文選」卷十三）の「美人邁兮音塵闕、隔千里兮共明月（美人は去つて音信も絶えたが、千里を隔

てて同じ月を見ているのであろう)」を引き、「見月思人之意」があるという。○灞亭：霸陵亭。霸水のほとりの亭で、西安の東にあり、唐人は東行するのひとを見送る際にはここで送別することが多かった。李白に「灞陵行送別詩」がある。○披心胸：胸襟を開く。謝靈運「酬從弟惠連」(「文選」卷二十五)に「末路值令弟、開顏披心胸(晩年になって弟である君に会い、寂しい顔を開いて喜び、胸の内をひろげて打ち明けることができた)」とある。○爲謝五老翁：この句、文字の異同多し。底本は「私のために老翁によりしく伝えてほしい」となる。五老翁とは、五老山で、山西の永濟県にあり、「元和郡県図志」卷十二に、堯の時代に五人の老人がここから星になつて空に登つたという伝説を載せる。陳鉄民は、後人は五老翁の意味が分からなかつたので「爲吾」としてしまつたのだらうという。

■口語訳

祁樂は後輩の秀才で

身を振り立てて河東から都に出てきた

以前長安の驪山に至り

温泉宮で皇帝に賦を献じたことがあつた

しかし天子は彼を召見しなかつたので

鞭を振るつて軍隊に身を投じたのであつた

今年の先月、長安に還つてきたが

手持ちのお金は空っぽだった

それがあるときふと興に乗り

川のほとりに聳える峯を描き出した

画を掛けた部屋では、ベッドの上には蒼梧山の雲があり
簾の下には天台山の松がある

いつのまにか高殿の上に居るかの如く
さつと清らかな風が吹いてくるようだ

いまや夏五月、炎雲が停滞し

空気は焼けて天地も紅に染まつている

鳥すら決して飛ぼうとしないこのときに

あなたは転がる蓬草のように、あてもなく出立される

少華山と首陽山とは

黄河を隔てて向かい合い、雄を競い合っている

(それと同じように、長安にいる私と河東に帰る君とは、黄河に隔てられて雄を競う存在となるだらう)

その黄河の上には新月が上り

清らかな光が、ここ関中の地に満ちあふれている

霸陵亭で別れの宴をもよおし

高らかに歌い、胸襟を開く

君よ、故里の山河に帰り着いたならば

私のために五老翁によりしくと伝えてくれたまえ

■解説

五言古詩。韻字は、「東・宮・戎・空・風・紅・蓬・雄・中・翁」で、平水韻では、上平一東の韻。「峯・松・胸」で、平水韻では、上平二冬の韻。通韻であろう。

撰者の岑参（七一五～七七〇）は、河南省南陽の人。天宝三年（七四四）の進士。節度使の幕僚として西域にあり、安史の乱（七五五～七六三）のさなかの至徳二年（七五七）には肅宗に従って長安入りしている。諸官を歴任し、代宗の永泰元年（七六五）に嘉州（四川省）刺史となった。大暦五年、成都で没。辺塞詩人として名があり、高適と併称される。岑嘉州集七巻がある。

聞一多「岑嘉州繫年考証」は、天宝十年（七五一）岑参は臨洮にあつて「臨洮客舍留別祁四」の詩を作つており、その後の作だろうから、天宝十一～十二年の作ではないか、とする。

河東の地へ還る友を送別する詩。祁樂は多才の人であつたが絵画にも優れていた。その彼が描いた作品を褒める中で、画中に描かれた代表的な景勝として、蒼梧山の雲と並んで天台山の松があげられている。「天台山と松」は、語注でも述べたように孫綽の賦に登場する、天台山を代表する景勝。二つしかあげられていない祁樂の絵画の題材のひとつにそれがあげられていることは、祁樂あるいは岑参にとつて、この景勝が重視されていたことを表す。

【補遺5】 雜言無錫惠山寺流泉歌

雜言、無錫惠山寺流泉の歌

皇甫冉

☆天台前集別編

★全唐詩卷二四九、唐皇甫冉詩集

■本文と訓訳

寺有泉兮泉在山 寺に泉有り、泉は山に在り
鏘金鳴玉兮長潺潺 金を鏘し玉を鳴らして長きこと潺潺
作潭鏡兮澄寺内 潭鏡を作して寺内に澄み
泛巖花兮到人間 巖花を泛べて人間に到る

土膏脈動知春早 土膏 脈動し、春の早きを知り
隈隩陰深長苔草 隈隩 陰深にして、苔草長し
處處縈迴石磴喧 處處 縈迴たる石磴に喧しく
朝朝盥漱山僧老 朝朝 盥漱する山僧老いたり

林松自古草自新 林松は自ら古くして、草は自ら新たなり
清流活活無冬春 清流は活活として冬春無し

任疏鑿兮任汲引 疏鑿に任せ、汲引に任す
若有意兮山中人 意有るが若し、山中の人

偏依佛界通仙境 偏ひとへに佛界に依り、仙境に通ず
明滅玲瓏媚林嶺 明滅玲瓏たる媚林の嶺

宛如太室臨九潭 宛も太室の九潭に臨むが如く
詎滅天台望三井 詎あに天台の三井を望むに滅ぜんや

我來結綬未經秋 我 綬を結びて來未だ秋を経ざるに

已厭微官憶舊遊 已に微官に厭きて舊遊を憶ふ
且復遲迴猶未去 且く復た遲迴して猶ほ未だ去らず
此心祇爲靈泉留 此の心 祇だ靈泉の爲に留まる

■文字の異同と校勘

〔林松自古草自新、清流活活無冬春〕唐皇甫冉詩集・全唐詩作「僧自老
松自新、流活活 無冬春」。〔任〕底本作與、做唐皇甫冉詩集改。

■語注

○雜言…古体詩の一種。句ごとの字数など不揃い。 ○無錫惠山寺…不詳。
○鏘金…金属器を打って音を出す。 ○潭鏡…鏡のように平らで澄み切
った淵。 ○巖花…用例がない。山に生えている花か。 ○土膏…土中に
含まれる、植物などを生長させる栄養分。 ○脈動…動脈の動きを言うが、
ここでは地中の土膏が、植物の発育を促進させている様を描くか。 ○隈
隩…曲がりくねって奥深い山奥の川岸。謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」〔文選〕
卷二十二に「逶迤傍隈隩、迢遞陟陁峴（曲がりくねった溪流に沿って進み、
また高い山に登ってゆく）」とあり、李善は「説文」の「隈、山曲也」と「爾雅」
の「隩、隈也」を引く。 ○陰深…暗い、また奥深い。 ○活活…活発
な様。特に水の流れる音や水が流れる様。「詩経」衛風・碩人に「河水洋洋、
北流活活（黄河の水はゆたかにゆたかに、北の方にざあざあと流れている）」
とある。 ○無冬春…冬枯れや春の雪解け水といった、季節による水量の
変化が無いこと、と解した。 ○疏鑿…川岸をうがち、水を通すこと。郭
璞「江賦」〔文選〕卷十二に「若乃巴東之峽、夏后疏鑿（さて巴東の峽
谷は、夏の禹王が切り開いたものである）」とある。 ○汲引…水流を汲み
取ること。郭璞「江賦」に「并吞沉澧、汲引沮漳（長江は、沉水と澧水と

を呑み込み、沮水と澧水を吸い上げる）」とある。 ○山中人…撰者を指すか。
○明滅…暗くなったり明るくなったりすること。 ○玲瓏…玉の澄み切
った音。澄み切った輝き。ここは後者で解した。 ○太室…中岳嵩山の主
峯。 ○九潭…太室山の東麓にある九龍潭であろう。 ○三井…天台山に
ある三段の滝。山内西部の桐柏觀の近くにあるとされ、唐代高宗玄宗期に、
雨乞いのための投龍璧の儀式が行われた（徐靈府「天台山記」）。 ○結綬
…印綬を身につけること。仕官すること。 ○遲迴…ぐずぐずしている様。
徘徊する様。

■語訳

寺には泉があり、泉は山にある
その泉は金属や玉を叩くような、さらさらとした流暢な音を立てる
鏡のように水平な淵をなして、寺の中で澄んでいて
山岳に生えているような花を浮かべて、人間世界へと流れてくる
大地の栄養が活発化して春が早くも訪れようとしているのが分かり
曲がりくねった川岸は暗くて奥深く、苔や草が高く伸びている
あちらこちらでくねくねと曲がっている石段に、やかましい音を立
て
毎朝洗顔に訪れる山僧は年老いている
松林も古びていくが、草は新しく生えてくる
清流は季節を問わずざあざあと流れている
川岸は清流に削られるにまかせ、また支流を受け入れるがままにす
る

山中の人は思うところがあるようだ

この地は、まったく仏教世界に依拠するようであり、仙境に通じるものである

きらきらときらめく美しい林の嶺が見える

(この景勝は) あたかも太室山が九潭に臨んでいるかのようで
天台山から三井を遠望するのにも劣りはしない

私は仕官してまだ一年もたたないのに

すでに微官を厭うて昔の遊覧を追慕している

かりそめにぐずぐずと徘徊して立ち去ることもしない

それはまさに靈妙な泉に心引かれて留まっているのだ

■解説

歌体。唐皇甫冉詩集は、九・十句めを、三言づつの二句にしている。五部に分かれ、それぞれ換韻している。韻字は、「山・潺・間」で、平水韻では、下平一五刪の韻。「早・草・老」で、平水韻では、上声一九皓の韻。「新・春・人」で、平水韻では、上平一一真の韻。「境・嶺・井」で、平水韻では上声二三梗の韻。「秋・遊・留」で、平水韻では、下平一一尤の韻。

撰者の皇甫冉(七一四〜七六七)は、字は茂政、潤州丹陽(江蘇省鎮江)の人で、晋の高士である謚の末裔という。皇甫曾の兄。張九齡に見いだされ、天寶十五年(七五六)、進士に及第。無錫県尉を始め諸官を歴任し、大暦元年(七六六)右補闕に累進。のち家に卒した。詩集三卷がある。「唐書」卷二〇二本伝。

この詩は解し難いところが多い。無錫の恵山寺を訪ね、その泉に心引かれてうたったもの。寺内に小山があるのだろう、小山水をなしているように描かれている。その小山と泉との組み合わせを、嵩山や天台山における山と水との組み合わせに勝るとも劣らないと述べる。いわば、優れた山水の代表として、天台山のそれが、嵩山のそれとともにあげられているのである。

またこれまで天台山を代表する景勝としては、赤城山と赤い霞、そして石梁飛瀑が中心であったが、この詩では三井が取り上げられている。これはそれまでの詩では見られなかったことで、高宗玄宗期にこの地で国家レベルでの雨乞いの儀式が行われていたことが、皇甫冉が三井に着目したことの背景にあるのではなからうか。

【補遺6】題昭上人房

昭上人の房に題す

皇甫冉

☆天台前集卷上

★文苑英華卷二三五(寺院)、全唐詩卷二五〇、唐皇甫冉詩集

■本文と訓訳

沃州傳教後	沃州 傳教の後
百衲老空林	百衲 空林に老ゆ
慮盡朝昏磬	慮は盡きる 朝昏の磬
禪隨坐臥心	禪は隨ふ 坐臥の心
鶴飛湖草迴	鶴は飛ぶ 湖 草 迴 <small>ほろ</small> かに
門閉野雲深	門は閉ざされ 野 雲 深し
地與天台接	地は天台と接す

中峯 早晚 尋 中峯 早晚 尋ねん

■文字の異同と校勘

〔地〕文苑英華作願〔二作地〕、全唐詩作地〔二作願〕。

■語注

○昭上人：不詳。○沃州：山名。沃洲とも。今の浙江省新昌県の東にある。山上に放鶴亭・養馬坡があり、晋代に支遁が鶴を放ち馬を養った処だと伝える。道教では第十五福地。実際に昭上人がその地で布教したのか、あるいは支遁が布教した地名を借りてきただけなのかは不明。○百衲：僧侶の衣服。多くの布を綴り合わせて作られていることからかく言う。ここでは僧侶そのものを指し、昭上人のことである。○空林：ひとけ人氣のない樹林。晋張協「雜詩」(六)「文選」卷二十九に「咆虎響窮山、鳴鶴聒空林(虎のほえる声が奥深い山じゅうに響きわたり、鶴の鳴き声が人氣のない林にやかましい)」とある。○朝昏：朝晩。あるいは日常。○磬：もと石の板を並べた楽器。ここでは寺院で用いる木魚。僧侶の招集や読経の時に用いる。ここでは読経を指す。○坐臥：日常の起居。○中峯：諸説ある。ここでは主峯と取ったが、群峯の中、つまり山中とも解せる。

■口語訳

沃州の地で仏教の教えを広めた後は
僧侶(昭上人)はひとけのない林で静かに老いてゆく
朝晩の読経で邪念・心慮は消え
日々の生活の中で禪定の心が自然とついてくる
この場所は、鶴が、湖や草原の上 遙か遠くを飛び

野を雲が深く覆い、閉ざされた門を尋ねてくる凡人たちもない
この地はかの天台山と接している
ともにその主峯を尋ねていこうではないか

■解説

五言律詩。韻字は、「林・心・深・尋」で、平水韻では、下平一二侵の韻。

昭上人の宿坊を尋ね、上人の隠棲ぶりを称えた詩。布教活動も終えて、人との交わりを絶つて静かに暮らす上人を賞賛をもって描き、さらにこの地が天台山と接しているので、その聖地をともに尋ねようと誘う。実際に上人の住まいが天台山と接していたのか、あるいは上人の隠遁ぶりが、聖地天台山に棲むのにふさわしいとしているのか、どちらとも解しうる。

いずれにせよ、天台山は、優れた隠者が尋ねるにふさわしい場所として、ここであげられている。

考察——盛唐期の天台山と文学補遺

今回は、前稿までに取り上げなかった、盛唐期までの天台山に関する詩歌を訳出した。初唐期のものではなく、盛唐期の六篇であった。前稿では、それぞれの詩の天台山への関わりについて、A「遠くから思いやる山」、B「自らは訪れないが、そこを訪ねる人がいる山」、C「自らが訪れる山」の三種類に分類した。今回の六篇は、【補遺3】李白、【補遺5】皇甫冉がAタイプ。【補遺4】岑参は絵画に描かれた天台山を歌うが、三分類でいえばAである。【補遺6】皇甫冉は、昭上人に天台山を訪ねることを促しているが、実際に彼が天台山に

行くことを想定しているわけではなく、天台山のような聖山が、昭上人にふさわしいというのが詩の趣旨。これもAに属する。

しかし皇甫冉の詩にも新味がある。【補遺5】では天台山の代表的な景勝として、三井をあげる。これはそれまでの作品には見られなかったもので、三井の名が、このころより知られるようになり、詩材に用いられるようになっていたことを示している。その背景には、唐皇室による、三井における国家祭祀が遇ったものと思われる。孫綽の賦にあつた、赤城・石梁、あるいは【補遺4】岑参にも見える「松」などに加えた、天台山を代表する新たな景勝地の登場である。

孟浩然について言えば、【補遺1】は明らかに彼の实地踏査経験を踏まえている。【補遺2】も、Aタイプとも取れるが、解説で考察したように、天台山を訪れた強い印象が、この詩に反映しているものと解釈される。彼の二作品は、Cのタイプに属しよう。なお、【補遺3】李白にある「緬懷在赤」の句は、「緬懷赤城標」という、【補遺1】孟浩然の句と酷似している。李白と孟浩然の文学的な関係を、強く伺わせるものとなっている。

注

(1) 本稿は同趣旨の訳注の九本目で、先立つものは次の通り。

- 「天台山の詩歌(其一)——六朝以前(上)」『埼玉大学紀要教育学部』第五八卷第一号 二〇〇九年。「同(其二)——六朝以前(中)」『同』第五八卷第二号 二〇〇九年。「同(其三)——六朝以前(下)」『同』第五九号第二号 二〇一〇年。「同(其四)——初唐」『同』第六〇巻第一号 二〇一一年。「同(其五)——盛唐(上)」『同』第六一巻第一号 二〇一一年。「同(其六)——盛唐(中の上)」『同』第六一巻第一号 二〇一一年。「同(其七)——盛唐(中の下)」『同』第六一巻第一号 二〇一二年。「同(其八)——盛唐(下)」『同』第六十二巻第一号。

凡例は前稿に同じ。

(2) 他に右記の詩があるが、それぞれの理由から検討の対象から省いた。

① 崔融「嵩山石淙待宴應制」…「今朝出豫臨懸圃、明日陪遊向赤城」の句がある。例の則天武后が催した石淙における宴の折の連作の一つ。石淙において武后に顧從して仙界へ登ることを歌い、仙界を表す語として赤城を出す。天台山の赤城山を言うのだろうが、具体性に乏しい。

② 孫逖「立秋日題安昌寺北山亭」…「高如石門頂、勝擬赤城標」の句がある。安昌寺の北山亭を褒めて、赤城の標にも勝る形勝だという。石門と併称するも、これも具体性に乏しい。

③ 劉長卿「和袁郎中破賊後軍行過剡中山水謹上太尉」…劉長卿は中唐期で扱う。

●参考文献と略称

○孟浩然関連

- 李景白校注『孟浩然詩集校注』(李景白) 巴蜀書社 一九八八年
- 徐鵬校注『孟浩然集校注』(徐鵬) 人民文学出版社 一九八九年
- 曹永東箋注『孟浩然詩集箋注』(曹永東) 天津古籍出版社 一九九〇年
- 趙桂藩注『孟浩然集注』(趙桂藩) 旅游教育出版社 一九九一年
- 佟培基箋注『孟浩然詩集箋注』(佟培基) 上海古籍出版社 二〇〇〇年
- 李白関連

宋刊本「李太白文集」(宋本) : 平岡武夫『唐代研究のしおり 李白の作品』京都大学人文科学研究所 一九五八年

王琦輯注『李太白全集』(王注本) 乾隆二四年(一七五九) 跋 : 中華書局版 一九七七年

瞿蛻園・朱金城校注『李白集校注』(瞿蛻園) 上海古籍出版社 一九八〇年

安旗主編『李白全集編年注釈』(安旗) 巴蜀書社 一九九〇年

詹鍇主編『李白全集校注彙集集評』(詹鍇) 百花文芸出版社 一九九六年

大野実之助『李太白詩全解』（大野）早稲田大学出版部 一九八〇年

○岑参関連

劉開揚箋註『岑参詩集編年箋註』（劉開揚）巴蜀書社 一九九五年

陳鉄民・侯忠義校注『岑参集校注』（陳鉄民）上海古籍出版社 二〇〇四年

廖立箋注『岑嘉州詩箋注』（廖立）中華書局 二〇〇四年

○詩歌の日本語訳

「詩経」の口語訳は、吉川幸次郎『詩経国風』岩波書店に、「文選」の

口語訳は、『新釈漢文大系 文選』明治書院によった。

（二〇一三年九月二十日提出）

（二〇一三年十一月二十一日受理）